

 書評

星川啓慈, 松田真理子 著

統合失調症と宗教

医療心理学とウィトゲンシュタイン

小林聡幸

臨床実習の学生に英語で「精神医学」は何かと問うと、十中八九「サイコロジー」といわれてしまうのだが、精神科医にとって心理学は意外に縁遠く、臨床心理学の松田真理子氏が『統合失調症のヌミノース体験』（創元社）なる書を上梓されているのも評者は知らなかった。本書はその松田氏と宗教哲学・言語哲学の星川啓慈氏が、おのおの3編ずつの論文を持ち寄り、おおむね交互に並べて、論文と論文の間を両者の対談でつなぐというきわめて特異な形態で綴った書である。評者はたまたま本書を都内の大手書店で見つけたが、「統合失調症」「宗教」「ウィトゲンシュタイン」と三題揃えとしたら、あまりに形而上学的かつ刺激的なタイトルに思わず目をみはった。精神医学や心理学と宗教とのかかわりは古くはウィリアム・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』やクルト・シュナイダーの『宗教精神病理学入門』が有名だが、やはりなかなか扱い難い領域なのだろう、まとまった著作は多くはない。そこで統合失調症と宗教を扱った本書は大変貴重と思われた。

ところが、本書のテーマは「人間にとってリアリティとは何か」ということだという。これは全体を読んでも隔靴搔痒の感が否めないのだが、病的体験のリアリティや宗教体験のリアリティ、そしてある人にとってリアルであることが別の人にとってリアルでないということをどう架橋するのかといった問題意識のようだ。

6編の論文はいささか雑多なものだが、上記の三題揃えを緩やかに連携しているのであろう。冒頭の星川氏の統合失調症概念の文化構成主義的解釈は今さらといった感のものだが、本書での星川氏の関心は終始ウィトゲンシュタインにあり、この論考もウィトゲンシュタインに関連しているという。2編目は、1993年に発見されたウィトゲンシュタインの

日記から、哲学的考察の背景でなされた宗教への対峙を論じており、これは「宗教」のテーマに結びつく。3編目は、絶筆「確実性について」を論じたもので、確実性がプランケンブルクの自明性と深いレベルで同じもののだとして、統合失調症との通路が拓かれている。

他方、松田氏は臨床例の面接を踏まえ、幻聴と幻視、言語的思考とイメージの思考、それと宗教的体験との関連を論じている。着眼はおもしろいが、いまだ研究としては途中経過と思われる。「宇宙神」の妄想と中世キリスト教の神概念の共通性を「中心」「円」「球」といったキーワードに求める論考も興味深いのだが、むしろ我々精神病理学をやるものとしては、呈示症例の「一億キロ」「1年に5,000万人殺す」といった表現のほうに注意が向く。精神病理学では統合失調症に固有のもの、その基本障碍につながるものを追求める傾向にあるのに対して、松田氏は正常体験や宗教体験に共通するものを見いだそうとしているのだ。「秩序について」という論文でも発達と発症とを直線上において考えようとしているようだ。かたや星川氏はウィトゲンシュタインを俎上に載せて、論理と心理を結びつけようとしている。

「つなぐ」ことを目指す本書では、上述のように各論文を対談でつなぐようとしているわけだが、いまだ、さまざまな要素が焦点を結ばず、つなぎきれない感を抱く。とはいえ、いわば未開拓の領域を埋める仕事であり、宗教と精神医学に関心ある読者に一読をお勧めしたい。

(自治医科大学精神医学教室)

●A5 300頁 2010 定価3,675円(本体3,500円+税) 創元社